

弘前藩「御定書」に関する一考察

蝦名 庸一

はしがき

弘前藩において藩政機構が漸く固まって、城下並びに鄉村に対して広く法的規制が整備されるのは、四代藩主津軽信政の時代（明暦二年——宝永七年・一六五六——一七一〇）であり、それに南進して、既に農民統制を中心に発表したことがあった。^(注1)

ここでは弘前藩政確立期における藩の法令を編纂した「御定書」について、その内容の一部を取り上げ、大名領主権が弘前藩の場合にはどのような形で、どのような内容の法規制を行っていたかの一端をさぐってみたい。先ず「御定書」の成立事情やその史料としての価値について考察しよう。「御定書」として現存するのは七冊で、文部省史料館に津軽家文書として所蔵されている。これに載せられている諸規定は、寛文四年（一六六四）から延宝三年（一六七五）にいたる十二年間のもので、信政治世の初期に属する。現存する弘前藩の法令集としては、恐らく最も古いものと考えられる。日記役が置か

れて、公式の弘前藩庁日記の記録が始まるのは延宝三年（一六七五）二月からである（それ以前に前書は存在する）。日々の政務を処理する上での便宜を考えて、この日記役が諸々の定法・規式・先例などを項目毎に分類整理し、逐次追加増補したものが「御用格」として今日、弘前図書館に所蔵されている。この事から推測すると、この「御定書」は、日記役の下で諸法令を「御用格」に整理する前の段階で、寛文四年から延宝三年までのものを、ただ毎次を追って収録したものと想像されるのである。それ故に、年ごとにどのように法的規制が進んだかを、これを通して知り得ることにちなり、当時における実際の政治・経済や社会情勢を知るための貴重な史料といつてよいであろう。

「御定書」所収の法令は、直接に領内の人民へ課されたものではなく、藩の行政機構の各役職に対する訓令の形式をとっている。すなわち各奉行や目付役或は番所あてに出されているのである。それが種々の役人に及んでいるから、その内容は多岐にわたっており、当時における

行政法令集といつた性格のものである。表題の「御定書」から考へられるような犯罪に対する刑法や刑事訴訟法の内容のものは収録されていない。

では内容の一部をとり上げて考察してみたい。

(一)

一般に寛文・延宝期は、全国的に見て小農経営が満面開花し、地方知行が廃止されて領主の手による統一的な農民支配が確立し、これと同時に城下町が領域内の中心都市として大きな発展をとける時期であると解されている。弘前藩の場合、後にも触れるように地方知行が一応廃止されるのは貞享二年(一六八五)であるから、少しずれているが、しかし年貢徴集が組織的に行われ、農民支配が確立するのは寛文四年(一六六四)十一月六日付の弘前「御定書」には寛文四年(一六六四)十一月六日付の弘前御米蔵奉行に対する訓令が載せられている。

定

一弘前御米蔵請取之儀今度改之申付候。各早朝より晩に至迄、御蔵に相詰、御百共のけがけ次第無遅々納所被仕へし。各儀は不及申、刈取によらず礼物一切請申固敷候。勿論御百姓共に、さしても無之儀を、何角と申かけ迷惑に不及様に各此得可被申候事。

二御蔵米請取方近年相定之通、刈取之者成程刈にあたり、

米を十分に入、則米主に計をかけさせ可納之也。残米の分は、米主方へ取らせ人切に延を立させ、可被申候事。

一三御年貢米夥々沢へ下ケ不申、近所御蔵へ納之分、御蔵諸給人老年作共に作人方より米納、三斗入老儀に付京

御老升五合宛夥々沢江の駄賃米に申付候。依數次才老入切に右の駄賃米其度々に請取被申、此分は別帳に付置京御詰にて手形出し申べし。但右駄賃米請取候河、京御老升五合入に新敷申付候事。

一四御蔵百畦諸給人によらず弘前御蔵江納米其遣御代官中手形にて納所可仕旨申渡候。御代官指図之外、諸取候儀堅無用之事。

一五雜石之儀も御代官よりの手形次第請取可被申候事。

一六御蔵未納方、今度改之処に当分扱の分は納三斗入老儀に付京御三斗七斗五合又は三斗八升宛の廻しに有之候事。

一七先年は兎喰・ふけへりの分、御勘定に不相立に付、廻納三斗入老儀京御三斗六斗に相定之。当御物成よりは右へり米差引可遣之間、出来之分、あらわし御勘定に相立可被申候事。

一八諸扶持方に相渡候御米、先年廻し不足にて諸取候面々迷惑の由候間、当年より京御を下にらくに置、計をかけ有跡に相渡可被申候事。

一九各請取米の内、兎喰ふけ米にてくつろき儀有之は、其

分は買敷次才を依切に糾裁改、可被申候事。

「御蔵米請取候刻、糾取不情にては米の入多少有之、廻しも不同にて、且は御損米有之へし。一々吟味仕、何も一手に受納被仕へし、付り、俵へ入候儀、罷じやうにて咬へちり米無之様に可被申候事。

「御蔵米請取之帳切半紙墨筆おこし炭先年は自分として相調候得共、当年は公儀より指積相渡候。但並之儀は、入用次第吟味仕請取可被申候事。

「今度御横目申付候間、平に相對にて御蔵出し入仕へし。御蔵奉行、向後常年切に申付候。御勘定之儀も常年に可被相勤候事。

右之条々堅可被相守者也。

右の規定の才一系によれば、この年すなわち寛文四年から米蔵での請取に關する規定を改めたわけで、米蔵奉行は早朝から晩まで蔵に詰め、農民が米を運ぶ才、産物なく受取るよう指示している。その際、礼物を一切受けてはならないとし、また百姓に何かと文句をつけて迷惑をかけないように注意せよと言っており、この事は、それ以前に不法な農民支配があったことに對する反省が然らしめたものである。なお米を受け納めるには代官の手形を必要とした（4・5条）。農民との直接取引の場合は不正の入る可能性が考えられるからである。その他、米の計り方に至るまで指示している。

米蔵から扶持米を支給するに當つても、正確を期するよう細かい点にわたつて注意した（8・9条）。また御蔵奉行の任期を一年としてゐることに注目される（12条）。同じ職に長くともまれに情實が入ることが避け難いからである。なおまた米蔵奉行に對する監察官としての横目を任命し、横目と「相對にて御蔵出し入」するよう指示した。かように公正を確保しようとしていた努力は、この訓令から十分うかがうことが出来るのである。同じような規定は三世寺・高杉御蔵奉行あてのものにも見られるので、参考史料として注の項に掲載しておく。

(二)

弘前藩の税制一般が整備されたのは、貞享四年（一六八七）改正の田畑賣納法以來とされるが、それ以前の藩政初期・慶長頃より年貢徴收の行われていたこと勿論である。ただ藩政初期における税制については明確な史料がないので、よく実態をつかめないのが現状である。「御定書」には寛文五年（一六六五）十一月十一日付、郡奉行あて「御蔵百姓諸役之定」¹掲載されている。

御蔵百姓諸役之定

- 1 御年貢米無任々皆済可仕事。
- 2 御物成壹石に立木を駄運せ枝宛可出事。
- 3 春山作銀子三拾五匁日數に而は七拾日、夏山拾五匁日

敬にては四拾五日、先規より勤させ候事。併向後は御損無之、御百姓のかれざるやうに各々廻しの儀、了簡被致其通可申渡事。

一⁴ 麻糸御百姓を軒に付、百目宛可出之事。付、御代官諸私之儀目非分無之、請私可被申渡事。

一⁵ 御役油を軒に付納対五升宛出候事。今度納対五升入之并にて是ノ御百姓計則とをかけ指上させ可申事。其并に目れ方り候分は御百姓取可申由、可被申渡事。白銀にて上ヶ申候者次銀貳匁宛上ヶせ可申候事。

一⁶ 野手状米を斗を宛上ヶせ可申事。但銀子にて上ヶ候ものは、次銀貳匁六分宛勝手次才上ヶせ可申候。米之儀は弘前三世寺坂屋野水鉢ヶ沢外浪御蔵江手寄次才上納可仕候。野手状米役差引ヶ申候分は書付にて相渡候間、其旨御代官江可被申渡事。

一⁷ 御役真綿之儀家を軒より貳拾目出せ候而御蔵米貳升五合宛先規より被下之候へとも、自今以後は是軒に付真綿拾五匁、銀子にては次銀貳匁宛宛出せ、貳升五合の米の儀は以未遣し申向敷候。但役綿指引ヶ候分は書付にて相渡候間、其旨御代官江可被申渡事。

一⁸ 御召馬之外御馬屋御時之事。但馬屋に御馬拾疋宛四拾疋の分に候間、馬草人足之儀は御勘定所より割付のことく出せ可被申事。

一⁹ 右同所入用之薪分草くひけが御馬敷に施し右何も御勘定所より割付請取、御百姓共に出せ候様に御代官

衆江可被申渡事。

一¹⁰ 御馬きのの儀買裁書請取、出せ可被申候事。

一¹¹ 正月御入用一にか竹三把、一欸念駄、一まめから念駄、先規のことく御百姓より出せ神金左江内方江渡せ可被申事。

一¹² 御すゝ取御入用てんちやうはき竹を駄并ちうち竹百本、先規のことく御百姓より出せ又田菊岡弥百藤尊赤江渡せ可被申事。

一¹³ 正月御台所にて御入用のすきわり、つてべ縄のわり小けわら先規のことく御勘定所より割付の買裁書請取、御代官江可被申渡事。

一¹⁴ 五月御入用一かつぎ、一しやうふ、一よもき御勘定場より割付の書付請取如先規之、御百姓に出せ可申候事。

一¹⁵ 御上下の時分、人馬御勘定場より割付の書付請取、無滞出せ可申候事。

一¹⁶ 七種上ヶ候事以未大鯉ひちり共に申付、神金左江内方へ相渡せ可被申候事。

一¹⁷ 御百姓歩米坂高拾石に納三斗の積玉々上納可仕事。

一¹⁸ 雪たれの事、所々へ相渡候分、御勘定所より買裁書請取被申、無滞々様に御代官中へ可被申渡事。

一¹⁹ 木不舞の事足又御勘定所より買裁書請取被申、御百姓より出銀にて入山に申付、御百姓手廻能様に可被申付事。

一²⁰ 御疊屋にて入用のわらの儀、御勘定所より買裁書請取

御代官受可被申渡事。但五尺繩にて蒙之中を巻メ宛たるべし。付、くゝの儀もそれノに由て可被申候事。
一²¹ 御城内御掃除人足勤替之儀、御勘定所より割付請取御百姓不勞様に了簡可有之事。

一²² 漆かき并山漆製取申事、如先規之御感諸給人百姓出せ可申候。但御百姓出候儀は其役者に承、年々より人足多少の考仕、不勞様に可被申付事。

一²³ 清蔵しつゝ蔵の事、江戸寛元御遣用年中に何程入候と買敷其役者各へ可申候間、先規のことく在々より出せ候様に其役者又は御代官へも可被申付候。自今以後弘前にて漬也可申候間、其通可被申渡事。

一²⁴ 御鷹野の時分くのかんしき出候事、如前々無遅々相渡させ可被申候。乍去御鷹野相濟候ハ、在々へ夫々に返させ候様に御代官中江可被申渡事。

一²⁵ 御屋うしき上ヶ候事、自今以後、年中御入用程實能時分に一度に送り申候様に小細工方江申渡候間、其時分人足の儀名江断可有候間、指摘り御代官江可申渡事。

一²⁶ 御検地打御検見小横目御鷹師御鉄屹打御代官受吉利支丹改錢炮鳥等宿送可被申付候事。

一²⁷ 在々御指廻り候事向後札立遣し可申候間、夫次才如先規御百姓に贈申付候へと御代官江可被申渡候。付、莊宿送りの儀御百姓不勞様に了簡可有事。

一²⁸ 白はし水上ヶ候事、年中御入用程神金左江門に申付其旨小細工方江申渡し、能時分一度に伐せ候様に申付

候条、其節小細工方より人足の儀、各江前次才買敷示届御代官江可被申渡事。

一²⁹ 御鷹解犬の事如先規之犬改人断次才在々より出せ可被申候。但外決西決夏冬により弘前江申付様者可有事。懶燭屋入用おから在々より出候事、但御勘定場より割付ケ請取可派申付候。近年より懶燭屋役者方より在々へ人指遣しおからえり請取候由、以未は御百姓費に不成様に了簡も便ハ、可被申渡候事。

一³¹ おからの事、塩消屋御物頭衆より入用のおから御勘定所よりわりの書付請取、おから有之時分在々にて貯置せ、懶燭屋おから取候跡を渡し候様に手廻しの儀了簡可有事。

右従先規有束諸役出物の内、数多御免当役出物の内少々其品を改、今度所被相定也。自今以後亦御百姓不窮困様に各了簡可爲肝要者也。

寛文五年十一月十一日

御郡奉行

北村与左江門殿

竹森 弥大天殿

これは御蔵百姓すなわち藩直轄地の百姓に対する諸貢担について規定したものである。これによると先ず年貢米を期限におくれることなく完納すべきことを命ずる一方、物成すなわち年貢米を石にのぎ立米を駄と並一枚を出させていた(1・2条)。年貢と同時に付加税として

負担せねたわけである。その他の付加税としては、百姓一軒に対し、麻糸百目、油五升（代銀で二匁）、野手狄水一才一升（代銀の場合二匁六分）、真綿十五目（代銀の場合二匁）等が課せられていた。また代官より割宛があれば、地主の馬及び着で飼育している馬の鉢人足、薪、かり草等の負担があつたのである。さらにまた藩に直結する百姓ということから、城内で年中行事に用いる諸用品や労働をも負担した。正月に使うにか竹、菰、まめかり、或はすす取に使う天上はき竹、ちうち竹など、五月に使うしやうぶやよもぎの類である。

その他、畳屋で必要とするわら、鷹狩に用いるくつやかきじき、蛸燭屋のおから、更には城内の掃除人足や漆かき・山漆の実取作業の労働力、参勤交代における上下の騎分の人馬の提供、検地人や代官・切支丹改役人等の宿送り等の課税があつた。しかしながらそのような負担は人々に軽減されていくのであつて、正月用の門松や城門まはら草ほうき、藩主等の使う草履わり、ほし蕨の類は出さなくてはよくなかつた。また貞享の検地以後は現物で納めずに代米で納めてよいとされたのである。ともかく「御定書」所収のこの種の規定によつて、税制が新しく作付けられて確立する貞享以前の農民負担を、その全貌といわないまでも知ることが可能なのである。

(三)

津輕地方における日本海への海運をみると、十三湊の占める地位は江戸初期までは着しく高いものがあつた。弘前↓岩木川↓十三↓敦賀↓大津↓京都のコースは政治・経済・文化すべての点において中央と津輕地方とを結ぶ動脈であつた。江戸時代が進むにつれて、積荷の変化や弘前からの陸路の便も手伝い、十三湊から鰺ヶ沢の方へ比重が移ることになるのである。しかし岩木川沿岸の三世寺や板屋野木（板柳）の水蔵からは、川船に積んで十三湊に下し、上方へ輸送していった。「御定書」には十三湊之口御横目敷にあつた寛文五年三月六日付の訓令が載っている。

寛

一十三御山奉行半前にて直納之御米証より請取之刻、各出合目彼是見届、御蔵に相対可被仕候。御米請取次才之儀、御山奉行方江安鋪定書渡置候紙面之通、念を入可被申事。

一三世寺板屋野木御蔵より下米、是又橋荷状之箇御山奉行各出合御米京舁廻し定書之通念を入見届、御蔵江入置可申候。勿論御蔵入之御米沖之口出船之刻、是又何も出合廻し見届、帳面に付置可被申事。

一十三山沖之口出材水船道具小技木によらず御山奉行方にて檢印打、上中下之位付、相定之、買主売人切に手形を打出之候。夫々の買人断次才早速御横目所江出合、

右御山奉行手形之通買數改之、少淺無渥、相返可被申候事。

一御山奉行手形無之材木之儀は不及申、極印不打材木亦本もまきれ出さるやうに吟味仕へし、貝屑手寄のためまきれたる仕形被仕間鋪候事。

一本綿新物古手拾歩を御役之儀、去年より固役に申付候。

御役出候固本綿新物古手綿茶紙其外細物類の棧意面に付而次銀三匁五分宛御役銀にて請取可被申候。荷物惣高に応し御役銀商人方各江可相渡候間、懸出無之様に早速請取、集次才可被指上候事。

一諸商人上方と指下候荷物、固數吟味之儀者荷主方と書付を取相違無之旨、宿に裏書仕せ、其手形にて御勘定可被相勤事。御用荷物并御家中より少、誂荷之分者吟味被仕、可為無役事。

一瀬戸物舟持參候荷物商人共小付荷之分并水主私物売人に付忝固宛是又可為無役事。

一固數改候場所之儀、何方にても商人共勝手次才早速出合、埒明候而其上者荷主心次才可被申付事。

一旅舟着岸之時分、宿主斷可有之。先喜利支丹改才一に被申付。其上人數何人乗と船頭方と宿を以書付を取せ相違無之旨、則宿主に裏判可仕也候事。

一固役銀請取之刻、船之大小同様に相究候而は、不同有之申に候。船に構無之、水主員數相改、客人に付先規のこくとく御役銀三匁宛次銀にて請取可被申事。

一西役之儀は水主之外之由候。御國江入者は客人に付次銀匁宛宛、同出役匁宛宛御役銀請取可被申候。付、宿主向役西役之人數客人にても隨置、賤より知也申者有之は、其宿主別郷江直払せへき旨、可被申渡事。

一金銀上り候儀御為を一概に存入、舟頭商人不可及難儀に、向後旅船も同入仕様に丁箇肝要事。

一大風之時分破損船有之は、自他の船によらず隨分損を入たす可申旨、匠所の者共へ急度可被申渡候。自然相果者有之は、諸道具改置、以表主出次才相渡可被申事。

一船頭共出舟之節、何角と申懸ケ、遅々仕せ下及迷惑様に可被相心得。勿論商人船頭方より札銀請申間數事。

一手代之儀は向後堅無用たるべき事。

一の糸々産背申、万一むさき仕形有之由、於相違公儀者、吟味之上可為恥辱者也。

寛文五年三月六日

十三沖之口

御横目衆

覽

一御蔵米并御家中商人米によらず沖之口出水の儀、御船紙之外、まきれ出さるやうに堅吟味可被仕候。但御蔵より売渡候御判氣米百石に付、代銀百貫拾目宛請取可被指上事。

右之通堅可被相守候。先日之々系に書落候付、却此候以上。

寛文五年三月十二日

十三冲之口

御横目家

右の訓令によれば、米や材木の十三湊での移出入について算数を十分吟味し、判紙（移出入許可証明）に記載のないものは一切出せなかった。また山奉行の手形のない材木は勿論、極印のない材木は一本たりとも出さないよう注意している。旅舟が着いた場合は、切支丹かどうかの調査をし、その上人数を正しく把握するよう要請し、領内に入る者に対しては一人につき次銀三匁宛、町役という名目で税を取るようになっていた。

さらに敦賀廻米に關しては、寛文十二年三月十五日付、敦賀御屋敷役人あて三十一項目にわたる詳細な布達を出しており、これまた「御定書」に収録されている。注（7）に参考史料として掲げておいたように、米の到着後の取扱いや、一俵毎によく吟味して格納したり、敦賀において米を売り渡す際の注意事項、大津へ移送する場合の指示事項その他不正や無作法な態度をいましめるなど、周到なものである。同趣旨のものが大津御屋敷役人にあて寛文十二年三月十五日付で出されている。

なお津輕米の上方での販売にあたって、敦賀は廻送米

の一時的保管地であり、販売先は主に大津と定まっていたとされる。貞享四年からは津輕藩米の上方への輸送はすべて大坂へ廻漕されることになる。これは河村瑞賢による西廻航路の開港が大きな理由であるが、その他、廻船事情の変化や蔵元を中核とする大坂における蔵米の販売機構の確立が考えられている。

（四）

「御定書」には藩政の中枢にある御用所や御寄合所に対して、これまで出された御条目（布達）の通り、油断なく行政を執行すべき事など八項目にわたって命じた訓令を載している。

被仰出之寛

- 一 兼而被仰出御条目の通急處相立候様に油断有向敷事。
- 一 支配より公事訴訟不滞様に可仕事。
- 一 寄合月に六日無向断可罷出事。附朝五つに出座可仕事。
- 一 新規の事并御用の儀無相違急處番書可仕也事。
- 一 御蔵田畑少成共不違公儀而内々にて取替申向鋪事。
- 一 兼而御法度の通御蔵金銀米錢誰によらず取替申儀空無用に可仕事。附、御褒美之事右同断。
- 一 御家中又者并士民弘前之内馬乗申向敷事。惣而左々にても付侍中處外の仕形無之様に可申付事。
- 一 江戸江の御飛脚月与みに一匁宛登せ候事。御用有之時

分は各別の事。

寛文六年三月十二日

御用所一通

御寄台所一通

右の訓令は藩の支配体制を強固にしていくためと考えられ、寄合は月に六日、向を休むこととなく実施するよう命じ、新規に起つた事項は御用の儀は向違ひなく留書すべき事とされた。御蔵田畑のひそかな交換とか御蔵の金銀と米銭の取替を禁止し、また一般士民の弘前の町中での馬乗を禁じた。江戸との連絡のためには、月に一度、定期的に飛脚を出すこととしていた。

(五)

藩政初期、農民支配の藩方機構がまだ十分に整っていないかつた段階では、直ちに全領地を藩主の支配下に置くことが困難であつたことも手伝い、家臣に知行地を分与して支配させる地方知行制度を採らざるを得なかつた。しかし四代津輕信政時代になると、家臣団の弘前居住が進展するに伴い、武士・農民に対する直接的統制が強化されていくわけである。そして弘前藩の場合、貞享二年（一六八五）に地方知行制度が廃止され、蔵米渡しとなつたのであるが、正徳二年（一七一三）にはまた旧に戻して地方知行に改め、安永三年（一七七四）にいたつて、

再び全面的に蔵米渡しとなるといふ変遷をたどっている。「御定書」には寛文十二年九月十六日に出された訓令が載っているが、次にあげるように知行地に対する制限令である。

寛

一 給合知行有高の内、畑地勝手能候とて自分の田にいらざる申向御事。

一回知行高不足に有之候とて畑地断方しに田にひらき申向候。若ひらき候へ、御検地申請、有高に可致都合事。

一 御蔵畑、給人畑、荒地各勝手能候所は、御代官肝煎諸

派仕候もの共見分の上、御勘定所の惣御検地大帳の面にて小名所を改書上仕、御蔵にひらき可申事。

右書付の通堅可被相守者也。

寛文十二年九月十六日

御郡奉行、御勘定奉行、御町奉行、惣御物頭中

惣小頭中、御目付方、小地行支配方、戸田七郎兵

衛、藩江半右衛門、久保田市郎左衛門、御作事方

右一通宛達

これによると知行地の畑地を好都合の土地として勝手に田に開いてはならぬとし、また知行高が不足だからと、畑地を断りなしに田にしてはならないとした。若し田にした場合は、検地を受けよと指示している。勿論

給人郷や藩直轄の畑とか荒地などで、新田に開墾できるものは、代官や肝煎が調査した上、検地台帳に書記して田にしてよかりたのである。

寛文八年にも家中への申渡しとして、知行地に対する制限が加えられている。知行地として与えられた土地以外をひそかに開墾したとしても、それは藩庁へ月上けてしまうこと、自分の知行地以外の場所は、道端であれ、至所であれ、川山岸であれ、ひそかに堰を掘つてはならないこと、承認のない地所を田に開いてはならないこと、承認を得た土地でもまだ開墾しない間は、農民に自由に耕作よしを刈りせるよう指示している。

以上、ここでは弘前藩「御定書」のごく一部を、体系づけも不十分なままに紹介したに過ぎない。いわば中間報告の如きものである。今後、機会を見て、藩政確立期における法令集たる「御定書」をより綿密に分析し、他の藩法との比較などを通して弘前藩法の特徴を明らかにしたいと考える。

八注

(1) 拙稿「津輕信政時代における法令の整備」(弘前大学国史研究 才二三号)

(2) 小野正雄「寛文・延宝期の流通機構」(日本経済史大系3 近世上、三五―頁)

(3) 定

一御百姓共下々米御蔵江のけ次才、無渥納所仕、壹人切に楚を立させ残米之分米主方江取仕被申べし。各ハ不及申、下代舛横目によらず、礼物一切請問敷事。勿論御百姓共にさしても無之儀、何角と申料、迷惑に不及様に各可被相心得之事。

一如毎年罷走やうこにてちり米無之様に俵江入可申事。

一新大舛にて三ツ入納、三斗之請取手形御百姓方江出し可申事。

一新大舛にて納所の時分、舛をうこかし候而ハ御百姓共損米有之事に候向、少後舛にあたら仕申間鋪候。米主にも其旨申前せ、舛をろくに置、舛にさハらす米を入、舛のうゑ、モリ不申様に、たいらにして計をかけさせ、はかり候も表へ入候も則米主に可申付事。

一御城米費目麁ケ沢・十三・板屋野木・三世寺・高杉右五ヶ所目札之面無相違斤量を一手にためし、輕重之印を相定、目札をつけ申へし。勿論斤量掛、手を替不申様に念を入可申事。

一御城米廻しの儀毎年のごとく敦賀京舛にて何方の御蔵も一手たるへし。但舛をろくに下に置、米を十分に入、計をかけへし。御横目各出合改目、若舛目廻しも相違の初、吟味之上にて舛を直させ可申事。

一御城米俵こしらへ如毎年之三重表にて笠標之結繩ありのふし念を入可被相認候。勿論結繩なるほどかたく志

めさせ、たてたわ十文字に懸させ可被申事。

一 高杉三世寺拔屋野水在、より下ヶ米納三斗入志表より

京米京斗並斗宛請取可被申候。別割付之書付次才改之。右京米別帳に仕上算用可被申事。

一 御蔵より米の出入、其度、に横目相對仕、相互に同道にて出し入仕へし。急用之儀又いかやうの米たりとも御蔵奉行一分に御米出し一切無用たるへし。

一 御城米の内より若米并飯米彼是当地にて京斗松之分廻し多少其度、御横目出合改之別帳に付置可被申事。

一 脇扶持方に遣之米あらは、御国の京斗をりくに置、斗の上有勢に相渡可被申事。売廻しの儀ハ先年の通可被仕事。

一 五ヶ所之御蔵へ請取米依將之刻、ちり米有之ハ、いのれも斗目改、御横目帳に付置可被申事。

一 さしは前々のことくちいさく可仕。勿論さし米ちり不申持可被仕事。

一 御蔵米請取之内、祢のミ喰、又ハむし付、減米有之は、御横目出合改帳に付置申へし。其上に吟味仕、御勘定に相立可申事。

一 駄賃馬参次才に少々内ものかえざるやうに下ヶさせ可被申事。

右ヶ条之趣堅可相守之。若違背之儀有之ハ不可道其耻者也。

寛文十一年正月十一日

三世寺

高杉

御蔵奉行一通宛

(4) 弘前市史(藩政編)二九四頁

(5) 御百姓諸役之内御赦免之覚

一 正月御内松一、大みとり六拾五本、中みとり貳拾本一、小みとり三拾五本一、根松三拾壹本一、葉松七メ一、ゆのり葉六メ一、はせ七升 右七色御百姓指上候儀、以末御赦免に候。御台所神金左征内より買上に申付候事。

一 御城にて御入用の草ほろぎ七メ一、みこほろぎ五メ并撥ゆい候みて神金左征内に申付買上候向、以末御百姓より出候儀御赦免の事。

一 御召草履買出候事、御小人より買調させ候向、指引可被申候。

一 御城中にて御小姓要入用の草履買上可申候向、以末御百姓草履買の儀差引可申事。

一 御祈念こまきの事、自今以後は寺社方為自分と相調可申候向、御百姓より出候儀御赦免の事。

一 ぼし蔵御百姓より出候儀御免、以末神金左征内手前々買上々に申付候事。

此紙面の通当暮より御百姓出前差引可申候 以上

寛文五年十一月十一日

御郡奉行江一通

御勘定奉行江一通

(6) 青森県租税誌前編上 二九七頁(みちのく文書11集)

(7) 覽

一 穀質御蔵屋鋪万事敦賢之作法次才可被相守候事。

一 御米上着候ハ、天氣次才早速船より上ヶさせ、いざれをさまし先船次才目札改斤料に掛、成程と念を入請取可被申候。若貴目不足ニ候ハ、御定之通三百目までハ用捨仕、其外ハ少かる候共たし米致させ可被申候。勿論満米少も請取被申向敷候。御米土用かけ候而上着之分ハ廻し並貴目茂不足無之由に候。秋風立候而以後之米ハ少々貴目左とかる戌申由に候。御米上着ニ砌、時分者貴目廻左と改請取可被申候。御米請取之儀隔分念を入其舛者船頭心易存候様に隨分相勤可被申候事。

一 御米水上之刻上乗ハ船之内に付居可申候。其外下代共母湯に付置、御米落こほれ不申候様に可被申付事。

一 御米表切にさしを入、相改可被申候。右さし米何ほど有之候とも毛艘切に計立、上乗に相形致させ有次才御勘定に相立可被申候事。

一 (略)

一 勝々沢・十三・振留野水・三世寺・青森五ヶ所よりの登せ米、印吟味被仕、穀質に而のまわしそれ／＼に帳面に付わけ、勘定場へ出し可被申候事。(以下五項省略)

右々条之外色々様子も可有之候。何儀によりず御勝手可然事ハ了箇可被仕候。難計儀ハ御圓元江窺可被得差四候。又指当不及思案儀着京・大津御泊守居方江相談

可被仕者也。

寛文十二年三月十五日

敦賢御屋鋪役人中

(8) 渡辺信夫著「幕藩制確立期の商品流通」(柏書房)

一 二〇二頁参照

(9) 同書 二〇七頁

(10) 同書 二〇八頁以下

(11) 覽

一 前々書上仕申請候新地、股々より南候を其通に仕置、普請等させ、事過候て申立候共先書上はも不片付、御公儀江可被召上候。南候て二年迄先書上江片付可申、三年めはたとへ不存候共申分立向敷事。

一 當年より自分の知行の外堰の大小に不寄、御公儀のおき地は不及申、道端荒所川山岸たり共、私に堰ほり申向敷事。御郡奉行江相断指図次才に可仕事。

一 新地書上無之地所ひらき申向敷候。書上の地所たり共ひらかさるうち、在々のもの、草よしかり候共、産乱不仕からせ可申事。

一 川端より廿向の内田地に南申向敷候。不苦候処ハ御郡奉行江断、差図次才に可仕事。

一 何も田屋の者并百姓等御公儀御法度の趣、御代官肝煎相触申節、其段相守可申旨可申付事。

寛文八年三月二十六日

右の旨御家中無残申渡